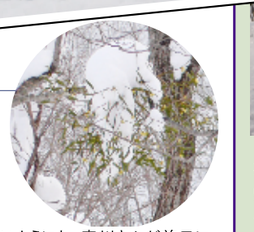
これでもか、の雪のゆ…
あえて
ひるがの体験ツアー

スノーシューを履いて出かけよう！

ひるがのに今シーズン初のドカ雪が降った直後。何を好んでか、もっと雪深い場所に足を踏み入れる体験隊の姿がありました。そう、今回は「あえて、雪を楽しんでみよう」をテーマに、スノーシュー体験、してきました。スキーでもスノボでもない、もうひとつの楽しみ方、発見です。

昨年から、ひるがの高原スキー場で、様々なアウトドアスポーツのガイドを手掛けているODSSさんにご協力いただき、スノーシューの半日ツアーで、分水嶺から叺渓谷周辺まで歩いてきました。
スノーシューというのは、いわば、西洋のカンジキ。雪の上でも、沈みが少ないことから、雪上ハイキングにはもってこい。雪山登山なんて、素人にはムリだけど、これなら、ガイドの案内で、誰でも手軽に雪の野山を楽しめます。

身近にあるのに出会わない、静かな静かな白い世界



「ここまでの新雪で歩くのは、シーズン通しても貴重だと思う」、とガイドの森川さんが言うとおり、いい大人でも、ついはしゃぎたくなるようなふかふかの雪。林の中では、自然の音だけが直に耳に届きます。小鳥の混群（普段は一緒に行動しない異種の小鳥が、越冬のために作る群れ）の冬ならではのハーモニーが聞けるのも、この静けさならではでしょうか。

カモシカの足跡

ウサギの足跡。親子らしきものもありました

私たちが歩きやすいようにと、森川さんが前日に歩いてつけておいてくれた一本道。そこに、山の中から現れたカモシカの足跡が合流しているのを発見。カモシカでも、雪を掻き分けて歩くのは大変なのかな？今度は黄色の実をいっぱいつけたヤドリギに遭遇。鳥も食べないほどまずいんだとか。ちなみに赤いのは、人が食べても甘くておいしいそうです。

お問合せ先　アウトドアサポートシステム（ODSS）／Tel058-248-4711

履いてみよう！

ひるがの高原スキー場内、ODSS受付前にて、まずは、スノーシューをレンタル。サイズを合わせ、履き方を教わります。サイズの合った靴が疲れない秘訣です。
ガイドは森井さんです→

分水嶺に移動。実際に歩いてみます。後ろの金具をはずし、小股でだらしなく歩くのが正解

ふかふかの雪を求めてスタート

折り返し地点でフリータイム。誰も見てないから、雪にだってまみれ放題（？）。一日コースでは、ランチも楽しむそうです。帰りは下りで、さらに踏み固められた雪の上を進むので、楽チン。行きの半分の時間で到着します。

今回使用したのは、登り用に後ろが開くタイプ。北欧ではつっかけ代わりだという軽い物も。

We love ひるがの

大好きなひるがののこと、聞かせてください ②

ふくて　とよまる
（90+4+0.5才）

うれしいなー　うれしいなー　ひるがのが　こんなになって

○うれしいこと　その①　「ひるがのーと」の誕生

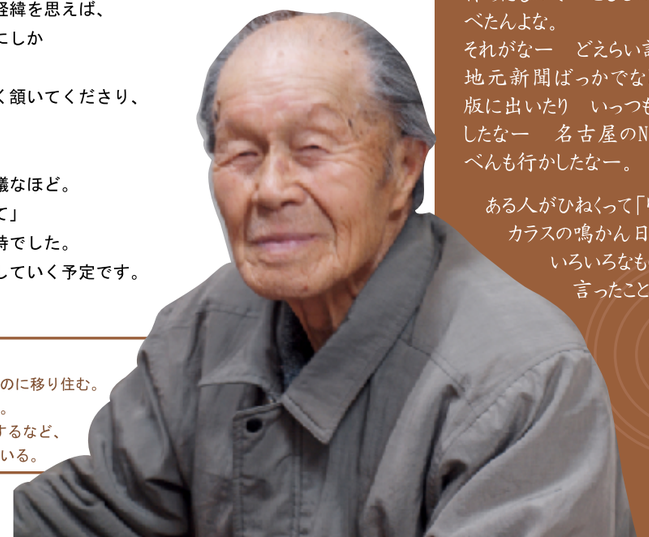
新聞ってまいにちじゃのうても、新しいことを知らせておくれりゃ　百年前のことでも、新聞やと思う。　こんなわけでオレは　この　ひるがのーとは　りっぱな新聞やと思っとる。

○うれしいこと　その②
たくさんの人にひるがのが愛されていること

とにかく　この　ひるがのってとこは　大ゲサに言や　北海道から沖縄まで全国中から寄ってきて　住みついておくれたなー。何がうれしいって　オレ　この年になって　一番うれしいことは　このことよな。
その証拠に　この前の　ひるがのーとで　山下さんというまだホヤホヤらしいご夫婦のことを読んだなぁ。
「今まで　あっちこっち住んだが、
このひるがのほどええとこは　どっこにもなかった。
この間生まれた　長男坊も　大岳（ヒロタケ）　とつけた」と。
オレ「ホロッ」とした。昔ながらのひるがののことを　たいてい知っとるでな。そして　あんまりうれしかったので　今度山下さんご夫婦に　廿の子が生まれたら　大日廿子（オヒメ）と名付け親になってあげようかと思った（ゴメン）

福手豊丸さんを取材して

昨年12月、福手さんのお宅にお邪魔して、豊丸さんにたくさんのお話をうかがいました。
90代も半ばというのに、とてもお元気。
歩いていらっしゃる姿は、ひるがのでは有名ですが、
距離にすると、なんと地球3周目（地球は1周約４万km）に入ったのだそうです。
「ひるがのが多くの人に愛される土地になって、
さらにそれを記事にして載せる情報誌ができたことがうれしい」と、
まだ生まれたばかりの「ひるがのーと」にとても大きな期待を寄せてくださっていました。
ご自身も、ひるがのについての本を執筆・出版され、
また、奥様とともに40年という長期間に渡って、
地域の婦人部の方々と文集を編んでいらした経緯を思えば、
私たちの動きなど、ひよっこのヨチヨチ歩きにしか
見えないのでは、とお恥ずかしい限りです。
ところが、私たちの言葉のひとつひとつに深く頷いてくださり、
また、福手さんの言葉のほぼすべてに、
私たちが共感できました。
こんなにも年齢に開きがあるのに、と、不思議なほど。
「続けていくことは難しいけれど、がんばって」
という温かい言葉に、勇気をいただいたひと時でした。
これからも、折に触れ、福手さん原稿を掲載していく予定です。
お楽しみに。



PROFILE：福手豊丸氏　国民学校の教師を経て
凌霜塾「大日道場」の主任として、昭和16年ひるがのに移り住む。
開拓当時からのひるがのを最もよく知る一人である。
ひるがのの歴史を綴った『回想　ひるがの』を出版するなど、
この地を開いた人々の足跡を、後世にも語り継いでいる。

ひるがの発刊誌の思い出

その①「蛭ヶ野だより」

今から60余年前のこと「蛭ヶ野だより」ってものを月1回2年くらい続けて出いたことがある。

「今、オレんたは開拓をはじめたばっかりで、食うや食わず丸太小屋住いの暮らしやが、
いざ友よ　共に築かむ　日留ヶ野に
乳と蜜との　流るる里を
という言葉を合言葉に、新しい村を創ろまいか。」
という目標を記事にして載せた。

もちろん、「乳と蜜との　流るる里」ということは、ただ物があふれるということでなく、
お互いの心も、乳や蜜のようにまろやかな　仲のええ　平和な地域
つまり　むらづくりということ。

その②「りんどう」

これも開拓のはじまったころ発行されたもので、
今でも原稿を書きないたおばあちゃんたちが5～6人はみえるはず。
大日開拓婦人会が作んないた。オレも婦人じゃないが　仲間にしてもらって、　たびたび出いた。驚きなれんなぇ。何と、43年もつづけないたぞな。うちにその原本を保存しとるがな。

暗いランプの下で　鉄のペンで　ガリ版で原紙というロウの紙へ　一字一字ガリガリと書きないた。紙かな？紙なんて今のようなツヤツヤしたものは一枚もなかった。
ザラ紙を頼みたてまつって手に入れて、トーシャ版という印刷機で　一枚一枚手めくりして作ったもので　とじるのは　紙をよって　つるべたんよな。
それがなー　どえらい評判になってな
地元新聞ばっかでなしに　大新聞の全国版に出いたり　いっつもテレビやラヂオで放送したなー　名古屋のNHKへも関係の人が何べんも行かしたなー。

ある人がひねくって「りんどうのことは
カラスの鳴かん日があっても毎日くらいに
いろいろなものが出るナー」と
言ったことがある。